



Title	泉鏡花作品における〈点景〉：作品の創作手法をめぐって
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59396
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【24】

氏 名	西 尾 元 伸
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	第 25332 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	泉鏡花作品における〈点景〉—作品の創作手法をめぐって—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 清水 康次 讲 师 合山林太郎

論文 内 容 の 要 旨

本論は、泉鏡花作品における〈点景〉をめぐって、作品の創作手法・技術という観点から、泉鏡花の諸作品を読解しようとしたものである。

「第一章 『春昼』『春昼後刻』考」では、作品の〈風景〉に「霞」が多用されていることに着目し、これが登場人物の心情の移り変わりを表現するための巧みな手法であったことに言及し、鏡花作品の細部をめぐる問題提起の端緒とした。

「第二章 『虚象』論」では、作品に登場する〈毒婦〉見物の様相が、当時、新聞に報道され話題となった「花井お梅の出獄」という実在の事件と類似することを指摘しつつも、実は新聞記事に拠らない部分を読ませる作品であると捉える。そして、瀧山という人物の執着を強く象徴する姿が描かれているとする。

「第三章 『沼夫人』論」では、「杜若」の花に注目して作品の背景に謡曲『杜若』の摂取を明らかにすることにより、作品中の怪事に、死者との対話の侧面があることを指摘する。そうした展開において、菖蒲と杜若が作品構成上絶対に欠かせないものになることを明らかにする。

「第四章 『楊柳歌』の京都、あるいは清水寺」では、作品発表当時（明治 40 年代初頭）の京都に、先行する古典作品に登場するような風景や人物たちが見いだされているとし、その京都の描き方や、舞台と役者の取り合わせが、清水寺を〈観音功德〉の場とするための周到な〈仕掛け〉であると位置づける。

「第五章 『海神別荘』考」では、台詞のなかでの古典作品の引用と解釈や、登場人物たちの対話を通して、「海」と「陸」との、〈悲しみ〉をめぐる価値観の違いが印象づけられるとする。美女の海中への《再生》は、陸上で葬送を背景に描かれるなかで、その人物の消えゆく〈悲しみ〉が、「見物席」からは、「陸」の人間だけが持ち得る感情として受け止められるものであることを述べる。

「付章 芥川作品の中の〈鏡花〉」では、芥川『奇怪な再会』と鏡花『三尺角』『三尺角拾遺』との、表現上の類似性について詳細に検討を加えるとともに、他作品の本文を検討し、執筆時期も視野に入れながら影響関係の再検討を試みている。ふたりの作家の決定的な差異も指摘する。

論文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、奇をてらうことなく、泉鏡花作品の〈点景〉を中心として、細部に目を配りながら、新しい作品論を構築しようとする意欲に満ちた試みであると評価することができる。

第一章における「霞」への着目は斬新なものであり、丁寧な追跡は首肯させるものがある。舞台となった土地の、海側と山側との対立を顕在化させたのも貴重な成果である。第二章に関して、作中の記述に対応する新聞記事を見出したことは、その努力が高く評価される。鏡花の読書体験を踏まえての分析も新しい成果と言え、男の執念を浮かび上がらせたのも説得力がある。第三章での謡曲『杜若』、第四章では、作中に部分的に言及されるものも含めて、鏡花が依拠したと思われる多くの古典作品に丁寧に目を配り、

論の展開に十分に活用しているのも従来の指摘を更新させる大きな成果である。第五章での「見物席」への視点も興味深く、問題意識をさらに発展させれば、今後の展開につながる可能性を見せていている。また、芥川との関係を考察した付章も、着実な検証によって新しい成果を含んでいる。

全体としての論述の姿勢は、部分的には不適当な用語も見られるが、丁寧な論述を心掛けた着実なものであり、表現上の弱点も少なく、好感が持てる文章であると評価することができる。

一方で課題も残されている。まず、何よりも〈点景〉を全論文の統一的視座しようとするのには無理がある。泉鏡花の作法の大枠を捉えようとするがもたらす成果よりも、そのことによって、逆に個々の論文の持つ可能性が狭められてしまう危惧が残る。

さらに、鏡花作品の特徴としての文脈を逸脱するような展開への言及が乏しい。第三章での新聞記事については、当時の新聞の低俗化というような現実への目配りが欠けている。また、毒殺という点では、実際にあった「野口男三郎事件」を見落としてもいる。第四章での「観音の功德」とすることがかえって論を弱める側面があることや、<心中>の意味付けに曖昧なところも残していることも気になるところである。芥川との関連では見落としている箇所もある。

全体として、さらにもう一步踏み込んだ分析と論述によって、論をより強固なものとすることが望まれる。ただし、これらはより一層の発展を期待するものであり、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。